

戦前・戦後の体験

2015年6月13日
工作22卒 小林正二

只今紹介されました工作22年卒業の小林です。

一昨年左下顎を手術したため発音や喋る事に若干の障害が残っており、お聞きづらい点もあるかと思いますが宜しく願います。私は今から70年前、即ち終戦の時は長岡工業専門学校2年生でした。終戦の詔勅、所謂玉音放送をラジオで聞いたのは、前日の空襲でまだ余塵が煙る熊谷市郊外の農家の庭先でした。勤労働員先の工場をサボって郷里へ帰る途中でした。今日は、この時代の学校生活を中心にお話したいと思っています。全て記憶を辿ってのお話ですので、年月その他違っている所もあるかも知れませんがお許し下さい

私が長岡工業専門学校へ入学したのは昭和19年、卒業は同22年で、終戦前後を挟んでの学生生活でした。入学時、当時の学校制度は小学校6年、(高等科2年)、中等学校5年、高等専門学校3年、その上に大学があり、高等学校は大学への予備門、専門学校は高等実業教育の場所であり、大学は所謂学問の蘊奥を極めるところでありました。当時、高等専門学校は高等学校が約25校、工業が約25校。経済が約17校、その他農林学校、薬学・歯学の学校が若干ありました。また軍医の養成のための医学専門学校が昭和18年に募集が始まったと記憶しています。

昭和16年、太平洋戦争が始まって直後、大きな戦果を挙げましたが昭和18年にはアッツ島玉砕、ガダルカナ島撤収。山本元帥戦死、と言う敗戦の足跡が近づいている時、18年「学徒戦時動員法」が發布され、学徒勤労働員が強化されました。そして学徒出陣が行われました。この学徒出陣とは、当時は徴兵制で、これまで高等専門学校以上の学生は卒業するまでは徴兵延期制度により兵役は免除されていましたが、工学部、医学部関係を除く他学部の学生は、この兵役免除の恩典がなくなり、兵役年齢に達したものは兵役に付くと言うものでありました。

(学徒出陣では東京在学の生徒・学生は18年10月神宮球場で雨の中での壮行会が行われ軍隊に行きました。)話はチョット反れますが、この制度によって工学・医学学校の学生以外の私の年代の友達も兵役に採られ、昭和20年始めには軍隊に行っております。そしてその仲間の出征に際しては、「俺も後から行くから靖国神社で待っているよ」、と言って送ったのでした。

このような状況下で行われた昭和19年の入学試験では工学部の応募率が高く7~8倍だったようです。この年から入試では全ての高等専門学校で英語の試験は無くなりました。そして入試での学科は数学物理、化学、歴史、国語だったか作文だったかはっきり記憶がありません。

先に述べたように工業の高等専門学校約25校には夫々特徴があり、例えば秋田高専は鉱山、横浜工専は造船、桐生工専は織物、などです。長岡工専は基礎学科に重点をおいた学校で、この時私は工作機械科へ入学しました。当時は長岡工専には、電気、化学、機械、精密、工作との5つの部門がありました。

機械科は機械全般、精密は簡単に言うと所謂、造兵、工作は工作機械、マザーマシンを作るための科でありました。精密と工作は昭和14年に時代の要請によって戦争にすぐ役立つ工業力の増強を目的に作られた学部でした。

昭和19年4月、入学した時は上級生は殆ど勤労働員に出て不在、校内は1年生ばかりで、授業は2年時から勤労働員があるため、連日8時間授業で夏休みはなかったと記憶しています。その中であって援農の稲刈手伝いや新潟、長岡間の鉄道の複線工事の作業などがありました。

毎日数冊の本とノート、それに弁当を抱えて登校し、長い百軒廊下に立ち寄って、オッスオッスの朝の挨拶で一日の授業が始まり、各教室での学科、製図、実習、実験それに体操、銃剣道と軍事教練に励みました。当時の先生は大学出身の学士がほとんどで、しかも文部省から派遣留学されていました。

授業は3学期制で、その内容は数学、ドイツ語、物理では教科書がありましたが、専門学科では全て教授の黒板を使っての講義が主体でありました。数学は高等代数とか立体幾何学などはなく微分・積分が主体でした。ドイツ語では野ばらとかローレライの詩があり心を和ませてくれました。工場実習とか水力、

金属材料での工学一般での知識は学校図書館での本で理解でしたが、材力・などの参考書は英訳書がほとんどで計算問題では所謂フートポンド式のため、kg・センチに換算せざるを得なく厄介でした。その他専門学科関係の専門書は殆どなく苦勞しました。

入学当時私は三条から学校まで汽車通学をしていましたが、7月頃から勉強について行くために長岡へ下宿したのです。当時はそんな状態で遊ぶ暇など全くありませんでした。然し学校生活に慣れ下宿生活を始めた頃からは代返で授業をサボることがありました。なにせ70名強の1クラスだったのでバレルことはありませんでした。

連日の授業で疲れ、正月休みを楽しみにしていた12月の中頃、突然、勤労働員の発表がありました。それは12月31日に群馬県小泉町の中島飛行機小泉製作所の矢島寮に集合とのことでありました。無常にも正月を家で過ごすことなく機械三科の生徒約200名強は現地へ集合したのです。

小泉製作所は従業員55,000人の大世帯であり内、本工16,000人、徴用工16,000人、動員学徒13,000人、女子挺身隊8400人だったと聞いております。

そして矢島寮には多くの専門学校生と大学の学生の他、台湾からの徴用の少年など多くの勤労働員の人があり、木造2階建ての長い寮のほか食堂、浴場など27棟があり、西部劇に出てくる様な街を作っていました。小樽高商、盛岡高専、専修大学、東大法学部、他などが記憶に残っています。後で分かったことですが、この時期東大在学中の三島由紀夫氏も居たとのことでした。

ここ小泉製作所は所謂0戦と艦上爆撃機銀河を組立てていました。

私の作業は、最初は鍛造工場での雑用、それから双発爆撃機「銀河」のエンジンの搭載作業でした。2月頃より空襲があり4月頃の空襲で工場のお大半がやられて生産が激減したので勤労働員学生のお大半は他の軍需工場へ配転され、私のクラスでは新潟の新潟鉄工とか富山の不二越工業、他等へ行きました。この頃から飛行機に取り付けるエンジンが入荷しなくなって、全く仕事がなく終日無為に過ぎる事が多くありました。このような状況下にあっても日本が負けるとは全く考えませんでした。8月終戦、現地で解散して家に帰りました。この間の8月1日に長岡での空襲があり長岡市は壊滅しました。この時友達の1人が死亡しました。

10月から授業が再開されましたが、上級生は皆卒業して誰もいませんでした。1年先輩は繰り上げ卒業で9月に卒業、彼らは実質1年の授業での卒業でした。当時、在学中に海軍委託生徒として在学中手当を貰い卒業してから技術見習士官となる制度や、海軍予備学生への応募制度がありました。2年先輩は卒業して19年入隊でしたが軍隊生活での終戦、3年先輩は18年入隊、在学当時に予備学生に応募して出征し、所謂特攻で戦死したものが多くいました。工作機械出身では30名を超えています。

授業が始まっても長岡市内には下宿する所はなく、学校では教室を改造して寮を作って募集していました。汽車通学では新潟とか柏崎からの通学するものもあり始業は9時でした。終業時間ははっきり記憶ありませんが遅くて4時頃と記憶しています。記憶に残っている授業では、英語が復活し、2年時にはGHQの指令書、3年時でのエドガーランポの小説などでした。また物理では3年時後半の原子物理学、人文では国会で審議中の新しい日本国憲法の講義、などでありました。戦後の開放感と戦時中の授業の押しつけから殆どの授業では実が入らず、また空席が多く、また全学ストライキを行われました。秋の天気の良い日には断りなく皆なでサボってお山へ遊びに行ったりしていました。午後からの英語、物理、製図の授業では出席者半数にも満たない事が多く見られました。又インカレが再開され運動の選手などが参加していったように記憶しています。昭和21年の新入生には兵隊帰りの人、予科練帰りの人等が見られました。

昭和22年年春、卒業設計と卒業試験を受けて卒業しました。

学生生活で強く記憶に残っているのは、学徒勤労働員で皆が同じ寮で、同じ職場で同じ飯を食べて生活し、空襲の爆撃にあって逃げ惑ったり、艦載機のグラマンの機銃掃射から身を隠したり、逃げ回ったりしていた事等でした。そして此処から生まれたクラスの絆であでありました。

卒業式までに就職が決まったのは僅か一桁台と聞いております。

当時、上場企業では生産工場が空襲でやられてしまって、応募企業は殆どなく、卒業後、地場の中小

企業への就職、その後暫く経ってから中学、高校、工業高校の教師になる人などが多くいました。私は運良く新潟鐵工所新潟製作所へ入所、内燃機工場へ配属となり。そこから私のサラリーマン生活が始まりました。その後も内燃機畑で35年間勤め、新潟工場の生産現場から東京の本社事業部の管理部長を最後に釧路市の釧路重工業へ出向となり、新潟鉄工退社後もここで約7年間努めて65歳の時本社時代に住んでいた埼玉の岩槻へ帰ってきました。

私のクラスのクラス会は、卒業以来今までずーっと続いており、最近の5～6年前から私が幹事をしていましたが(卒業以来22回の開催)今年の参加予定者は僅か4名となりましたので中止とし、解散となりました。

最後に「工作機械科の記念碑について お話をしておきたいと思います。

皆さんの中にはこの記念碑に気付いておられた方もあったかと思いますが、この記念碑は昭和59年6月に新潟大学工学部創立六〇周年記念が有った時、これに先立って工作機械の記念碑の除幕式が行われたのです。

先に述べたように工作機械科は戦時中国力増進のため昭和14年5月創設され、同22年迄の6回生まで約400名の卒業生を送り出しました。そこで、この名をとどめ、多くの戦病死された方々の慰霊を弔うための記念碑として工作機械卒業生の有志の寄付により設立されたものです。

場所は、現在の新潟大学工学部機械科大型実験室工場棟の北側にあつて、日本海を眺める場所に有ります。そして記念碑の表碑文には工作機械科の科歌「春秋の譜」が刻まれ、裏面には工作機械科の沿革と同窓生の足跡が刻まれております。

工作の科歌は工作機械の第一期生が作ったもので、長岡工専の中にあつて只1つの科歌であり学徒勤労働員の時であつたり学内のクラスコンパや全学運動会の時などで歌ったものでした。

歌詞は次の通りです(少し違っているかもしれません)

1番だけ歌わせていただきます。

- | | |
|---------------------------|--------------------------|
| 1 流れはゆるし栖吉川
若き日はまた還らぬを | 岸の緑は匂いたり
嘆かざらめや春の夜は |
| 2 またたく光露帯びて
友よ泣かんか浮島の | 涼しき風に影冴えぬ
城の石垣冷えたるに |
| 3 赤き陽早く沈みては
御山の紅葉燃えるにも | セイレイ空に多くして
おのこの胸は憂いたり |
| 4 北より寄せる風強く
時こそ来たれ感えし | 雪万障を埋みなば
若き心を語りなん |

お話したいことはまだ沢山あつたのですが、時間も限られていたので、原稿にして、整理してお話し致しました。分かりにくい発音で最後までお聞きづらい点もあつたかと思いますが、静聴、有難うございました。私はこの悠久会埼玉支部に参加し皆さん方とお会いできたことに喜びを感じております。最後に皆さん方のご健闘と同窓会の益々のご発展をお祈りしてお別れといたします。有難うございました。